

定本確立の試みと批評の展望

坂本 光

- Small, Ian, ed. *De Profundis*, "Epistola: in Carcere et Vinculis". Oxford: Oxford UP, 2005. Vol. 2 of *The Complete Works of Oscar Wilde*.
- Bristow, Joseph, ed. *The Picture of Dorian Gray*. Oxford: Oxford UP, 2005. Vol. 3 of *The Complete Works of Oscar Wilde*.
- Holland, Merlin, ed. *The Real Trial of Oscar Wilde: The First Uncensored Transcript of the Trial of Oscar Wilde vs. John Douglas (Marquess of Queensberry)*, 1985. New York: Fourth Estate, 2003.
- Roden, Frederick S., ed. *Palgrave Advances in Oscar Wilde Studies*. Houndsmills: Palgrave Macmillan, 2004.

ここで取り上げる上記4冊は、いずれも既に多くの目に触れているものに違いない。改めてこうして並べ、読み合わせてみると、ここしばらく Wilde 研究が見せてきた興隆に対して、ここまで来たのかという感慨に加え、この先にあるものへの大きな期待といささかの不安を感じざるを得ない。最初の2冊は主要作品初の本格的 variorum 版であり、3冊目はワイルド研究において触れずに済まされることが稀な裁判の、これも初めて出版される完全な記録。そして最後の1冊は生誕150年目に出版された、Wilde 研究の拡がりを概観し、それぞれの流れをたどってみせる言わばガイドブックである。いずれも有益な文献であると同時に、大変面白い読み物となっている。

1990年代半ば、筆者は University of Sussex に留学中で、そこには Jonathan Dollimore や Alan Sinfield がおり、構内の書店には Sinfield の *Wilde Century* (1994) が平積みになっていた。そうした新興勢力に対抗意識を持つ先生方と話をしていた折、たまたま Wilde の名前が挙がると、初老の教授がふと「私が若い頃には、Wilde と言えば童話作家、喜劇作家としか思い浮かばなかったが、今では立派な研究分野だね。」と言ったものである。当時、Wilde 研究の転機となった Richard

Ellmann の伝記 *Oscar Wilde* (1987) が大評判となって久しく、その中ではまだどこことなく apologetic に語られていた同性愛にまつわる諸々が、すでに Wilde 研究における主要な関心事として前景化されていた。その後、そうした流れがさらに加速され現在にいたることは周知の通りである。Wilde 研究はひとかどの規模を持つ産業となり、またそれと連動しつつ Wilde が文化的、そして社会的アイコンの役割をも担うようになって久しい。今回取り上げる文献で、多くの著者、執筆者が Wilde をめぐる現在のそうした状況にながしか収まりの悪さを感じているように見えるのは興味深い。

Ian Small, ed., *De Profundis*, “Epistola: in Carcere et Vinculis” (Oxford: Oxford UP, 2005)

ワイルドの獄中手記には大きく数えて4つの版が存在する。Robert Ross がタイプスク립トを元にその一部を *De Profundis* として出版した1905年版と1908年版。恐らくは同じタイプスク립トを用いて Vyvyan Holland により校訂された1949年版。そして大英図書館所蔵のマニュスク립トを用いた Hart-Davis による1962年版である。これまでは Hart-Davis による1962年版が事実上の決定版と見なされ、この版が獄中手記の読まれ方を方向付けてきた。Hart-Davis はマニュスク립トを底本とし、タイプスク립トに見られる多くの不備を指摘した上で、それにもとづく3つの版には校訂者の恣意的な改変が見られると批判している。そしてマニュスク립トから直接起こした版を自らが編纂した *The Complete Letters of Oscar Wilde* (London: Hart-Davis, 1962) に収めたのである。こうしてオリジナル重視の観点からもマニュスク립トにもとづく Hart-Davis 版が獄中手記の定本とされ、またこれは Wilde が Alfred Douglas に宛てた書簡であるという考え方が定着することとなった。1966年に出版された Collins 版 *Complete Works* に収められているのもこの版である。

Ian Small はこうした一連の流れを再考し、一種の原典批判を行っている。Small は、Wilde が Ross に複数のタイプスク립トを作成することを依頼し、その1つでは余白を広く取るよう指示したことに注目する。余白を大きく取ったタイプ原稿をもとに推敲するのは Wilde がよく用いた執筆法であり、したがってマニュスク립トは作品執筆のプロセスにおける草稿に過ぎない、と Small は考えるのである。こうした判断は2つの点で興味深い。Small 説を採るなら、まず獄中手記は「書簡」ではなく「作品」であると言うことになる。この違いは作品受

容に一定の変化を呼び起こさざるを得ないだろう。次に、この考え方は Ross と Holland による3つの版の再評価を促すことになる。二人をいささか頼りない校訂者ではなく、Wilde の意を汲んだ編集者と見なすこと、そして1905、1908、1942年版それぞれに、作品の完成形へ向けてのながしかの試みを見出すことが必要となるのである。

Small 版では、前半に Holland による1942年版をもとにマニュスク립トを校合した “Epistola: in Carcere et Vinculis” を収め、後半に Ross の1905年版と1908年版を校合した *De Profundis* を収めている。註釈は非常に充実しており、それだけでもこの版に十分な有用性を認めることが出来るだろう。しかしやはり興味深いのは、上述の説が展開される “Introduction” である。これは “Rationale” と銘打たれた一文から始まり、マニュスク립トが獄中という特殊な環境で執筆されたこと、作品の成立、保管、編集、校訂といったプロセスに関わる人々が時に対立し、複雑な人間関係にあったことなどを指摘する。そうした諸事情が新たな定本編纂をいかに困難なものとしているかを縷々説明するのである。そのような状況下、Small が諸版を読み合わせて導き出した結論には一応の説得力を認められる。また Small 版の構成は、諸版の間のダイナミズムを伝えると同時に定本を提示する、という困難な意図をよく体現していると言ってよいだろう。

一方で Small は、獄中手記が書簡であるなら the Oxford English Text 版 *Complete Works* の収録対象とはならず、またマニュスク립トそのままを未完成作品と見なすなら、これに1巻を与えることは不可能で、どちらの場合もいずれかの巻の追補に収めざるを得なかった、と指摘する。少々露悪的な出版裏話のようにも読めるが、これは Small 版の意図と意義、獄中手記が従来持っていたマージナルな位置付けを確認し克服しようとする試みの再確認として読むべきなのだろう。

Joseph Bristow, ed., *The Picture of Dorian Gray* (Oxford: Oxford UP, 2005)

The Picture of Dorian Gray の variorum 版が出版されるのはこれが初めてではない。すでに Donald L. Lawler による Norton Critical Editions 版 (1987) が存在し、Bristow 版、Lawler 版共に1890年版と1891年版双方のテキストを収め、それらとマニュスク립ト、タイプスク립ト等との校合を行っている。出版意図からして両者の規模が異なるのは当然のことで、Bristow 版は Lawler 版よりも完備した校合と何より詳細な註を持つことが特徴である。しかし Bristow は “Introduc-

tion”の中で、Lawler 版との間にはさらに大きな相違が存在すると言明する。Lawler が 1891 年版を Wilde の最終的な意図が反映された決定稿とみなし、1890 年版をそこに至る過程の表れと考えるのに対し、Bristow は両者を同じタイトルを持つそれぞれ独立した作品として扱う、と言うのである。Lawler は自分の版の校訂プロセスを *An Inquiry into Oscar Wilde's Revisions of The Picture of Dorian Gray* (1988) として出版しているが、その冒頭で “The thesis of this study of the revisions of *Dorian Gray* is that the dominant motive underlying all the important changes made by Wilde was an artistic desire to suppress an underlying moral which Wilde considered too obvious and, for the reason, distracting.” (2) と述べている。一方、Bristow はそうした経緯を大きくは取り上げず、したがって作品収録にあたっては、Lawler が 1891 年版を最初に収めているのに対し、Bristow は両テキストを出版年順に収めている。

Bristow が 2 つの版を別個のものとして扱うのは、両者が成立するにあたっては様々な要素、特に編集・出版上の要求や必要が大きな影響を与えていると考えるためだ。“The differing editorial requirements at the J. B. Lippincott Company and Ward, Lock & Co. dictated many aspects of the 1890 and 1891 editions, notably in connection with the length of the narrative and the shape of the plot, along with such matters as choice of vocabulary, use of idioms, punctuations, and paragraphing.” (xxxi) Bristow は “Introduction” のページを大きく割いて、双方の版が執筆出版されるに至った経緯をなぞり、それぞれの出版媒体が想定していた販路や読者層、それらに対応した編集意図に言及している。1890 年版は *Lippincott's Monthly Magazine*、つまり米国フィラデルフィアで編集され米英両国で出版される月刊誌に掲載される読み切り目玉作品として企画執筆され、一方 1891 年版は英国の出版社から、それぞれ装幀に意を凝らした小型普及版と大型豪華版の 2 通りで出版するために執筆された、とするのである。したがっておのずと作品成立の要件は異なり、Bristow は、その結果 2 つの版は別個の作品として結実した、と考える。しかしながら Bristow の記述の中には、上の引用にあるような文体的側面に関する論考はほとんど見られない。そういった考察と検証は、この版の読者に任されている。

Bristow が指摘してみせるのは、もっぱら諸版の異同の中でも内容に関する部分と出版形態や出版状況の関わりだ。良く知られた Wilde と J. M. Stoddart や Conan Doyle の会食から説き起こし、執筆過程での出版媒体からの影響を挙げてみせる。たとえばタイプスクリプトに存在した同性愛を暗示する描写が 1890 年版で和らげられたのは、*Lippincott's Monthly Magazine* の編集方針に従ったもので

あり、同時にきわどい記述自体は同雑誌の編集・営業方針にかなうものでもあった、とする。また 1891 年版については、Bristow は章の追加や細かな改訂に関して一般的な指摘をすると同時に、特に Charles Ricketts による装幀とタイトルページのデザイン、さらに八折版と四折版での出版を取り上げている。Ricketts による装幀等については、そこに Wilde の意図の反映と明らかに aesthetic な志向を見た上で、William Morris の Kelmscott Press に通じる工業化・規格化された出版物への反発があると考えられる。また 6 シリングで売られた八折版と 1 ギニーの四折版 (Edition de Luxe) には判型と装幀の違いしかなく、使われている版 (plate) は同じものの使い回しであること、そうした豪華版の出版方法は 19 世紀に於いてはラファエル前派の詩集によく見られるものの、小説の出版では珍しい、という指摘も興味深い。

Bristow はこうした 1891 年版の外見的特徴を、いずれも 1890 年版とは対照的な読者層、購買層を想定した出版意図の現れと評価し、“Preface” や章の追加を始めとする大改訂と結びつけて見せる。その論述には一定の説得力があるものの、Lawler 版との相違を強く打ち出す根拠とするには少々心許ないというのが率直な印象である。出版形態の違いが文体に反映された可能性を指摘しながら、一切その例をあげないことと合わせ、Bristow がこの版の独自性の前提としている主張、つまり 1890 年版と 1891 年版はタイトルを同じくする別個の作品であるという説の立証は、そのほとんどが読者に任されている感が強い。もちろん、Bristow 版がそうした作業に応えられるだけの労作であり、今後 *The Picture of Dorian Gray* を読むにあたってまず頼るべきテキストとなっていることは間違いないだろう。

Merlin Holland, ed., *The Real Trial of Oscar Wilde: The First Uncensored Transcript of the Trial of Oscar Wilde vs. John Douglas (Marquess of Queensberry)*, 1985 (New York: Fourth Estate, 2003)

いささか旧聞に属するが、前述の 2 冊を取り上げるなら、ぜひこの 1 冊にも言及しておきたい。Wilde と Queensberry 卿との裁判については、すでに何冊もの記録が出版されてきたが、これは今までになかった速記録にもとづく完全な再現記録である。この裁判を論ずる時、まず参照されてきたのは H. Montgomery Hyde による *The Trials of Oscar Wilde*, 2nd ed. (1962) だろう。この Hyde 版は、Stuart Mason が Christopher Millard 名義で出版した *Oscar Wilde: Three Times Tried* (1912)

をもとに、新聞記事等から情報を補足し、さらに Mason が用いた間接話法を直接話法に書き直して、臨場感を高めたものである。そうした成り立ち故に、今となってみれば推測にもとづく部分や省略が多く見られ、資料と言うよりも読み物と評価せざるを得ない。

一方 Holland 版は、8 人の速記者がリレー式に裁判の進行を記録し、その後それぞれが通常の文字に書き起こしたと思われるマニスクリプトをもとにしたものである。2000 年 9 月より 2001 年 2 月まで、大英図書館は Holland の協賛も得て“Oscar Wilde: A Life in Six Chapters”という展示を行った。この版の元となったマニスクリプトは、その折に匿名の所有者から展示物として貸し出されたものだ。その性質上、速記時の聞き取りミス、原稿に起こす際の誤読など、間違いが混入する余地は少なくないが、Holland は記録内の前後関係や他の資料との照合によって校訂を行い、一定の信頼に足るテキストを提供している。

もっとも Holland 版の意義は、多少の誤りが混入したところで大きく損なわれることはないだろう。なんと言っても、われわれはここに初めて Wilde が語った言葉そのまま、被告側弁護士 Edward Carson とのやり取りも一切の短縮なしに目にすることが出来るのである。たとえば Huysmans の *À Rebours* と *Dorian Gray* の影響関係に関する議論は、Hyde 版ではわずか数行に圧縮されているが、Holland 版では 5 ページに渡って展開される。そして何より、Wilde と Carson というまったく違った資質、対照的な種類の言語能力を持つ 2 人が交わすやり取りの中に、Wilde の雄弁さが持つ力と危うさが浮き彫りにされている。Carson の分析的な受け応えに誘われ Wilde が次々に韜晦と偽証を展開する様は、じつにスリリングである。自らの芸術論や作品への批判に対する Wilde の論駁は、Carson とのやり取りの中で、次第に私生活をめぐる事実の断片、Queensberry 側が用意した証拠や証言の網の中へと絡め取られてゆく。上述の 2 冊とはまったく異なった次元で、この裁判記録は新たな資料として、またテキストとして独自の意義を持つだろう。

Frederick S. Roden, ed., *Palgrave Advances in Oscar Wilde Studies* (Houndsmills: Palgrave Macmillan, 2004)

これは 2004 年から刊行が始まった *Palgrave Advances* シリーズの一冊で、主として大学院生レベルの読者を対象に、Wilde 研究の各領域における始まりから現在までを概観した論文集である。各章のタイトルと執筆者は次の通り：1. Biogra-

phies (Joseph Bristow)、2. *Wilde the Writer* (Anne Margaret Daniel)、3. *Performance Theory and Performativity* (Francesca Coppa)、4. *Aestheticism and Aesthetic Theory* (Allison Pease)、5. *Oscar Wilde, Commodity, Culture* (Dennis Denisoff)、6. *Philosophical Approaches to Interpretation of Oscar Wilde* (Philip Smith)、7. *Religion* (Patrick R. O' Malley)、8. *Gay Studies / Queer Theory and Oscar Wilde* (Richard A. Kaye)、9. *Oscar Wilde and Feminist Criticism* (Margaret Diane Stetz)、10. *Oscar Wilde: Nation and Empire* (Noreen Doody)。これらに加えて、詳細な年譜と研究領域ごとにまとめられた参考文献一覧が収められている。

各章タイトルを一瞥すれば分かるように、ワイルド研究における古典的領域から現在主流をなす領域までが、網羅的に目配りされている。各章の体裁は必ずしも統一ではなく、執筆者それぞれの切り口に任されているが、その背後に執筆者の立ち位置と姿勢が透けて見えるのが興味深い。各章の間にはところどころ内容の重複が見られ、そこにおのずと他領域との関連、時に対立が現れているのである。通読すると、Wilde 研究における歴史的経緯が一瞥できるだけでなく、現在の Wilde 研究が持つ重層的な拡がり、領域間のダイナミックな相関関係と共に実感できるだろう。また Wilde という素材を共通の土台として、様々な研究手法を概観できるという点でも面白い読み物となっている。類書には Ian Small の *Oscar Wilde: Recent Research* (2000) などがあるが、その Small による評価への反応を各所で見ることが出来るのも、この文献の面白味の一つである。ここでは特に次の 3 章を取り上げる。

第 1 章 Biographies (Joseph Bristow)

Bristow が章の中心に据えるのは、Wilde の伝記を扱うにあたり、なぜ多くの研究者達が客観的な事実確認を怠り、目を引く伝承を無批判に採用してしまう傾向があるのか、という問題である。流布してきた Wilde の人物像は誇張と潤色に事欠かず、それは学問的な伝記研究においても変わらなかった。そうした事態はこれまでたびたび指摘されてきたものの、現在にいたっても同様な傾向は完全には払拭されていない。Bristow はこうした状況に注目し、伝記研究の系譜をたどることによって、Wilde 受容の一側面をなしている潤色と誇張のメカニズムの検討を試みている。

Bristow が上述の現象の好例として取り上げるのは、Ellmann の *Oscar Wilde* (1987) である。Bristow はこのベストセラーを Wilde に“academic respectability”を与えた著作として高く評価するものの、同時に誤った記述が数多見られること、

そうした誤りは先行する伝記に含まれていた誤り、それも既にそうと知られていた誤りを無批判に取り入れたことに由来すると指摘する。そして Ellmann に続く研究者達も往々にして Ellmann の間違いをそのまま採用し、実像とはかけ離れた Wilde 像を再生産してきた、とするのである。

Bristow がこうした誤謬の系譜の起源としてあげるのが、Robert Harborough Sherard、Frank Harris、そして Alfred Douglas といった Wilde の友人知己でありながら誤った伝記的伝承を作り出してきた者達だ。Sherard と Harris は何より読者の気を引くために思いつきで話をふくらませ、Douglas はその時々の保身のために事実とは異なる Wilde 像を提示してきた、とする。そしてすでに Rupert Croft-Cooke が *The Untold Life of Oscar Wilde* (1972) で Sherard や Harris の間違いを指摘していたにもかかわらず、Ellmann は 2 人の著作を安易に参照したのだと考える。さらに歴史は繰り返す。Bristow は、Ellmann の伝記も出版直後から多くの間違いを指摘され、その翌々年には Horst Schroeder による考証研究も存在しながら、未だに強い影響力を持っていると指摘するのである。

4 部からなるこの章の第 2-3 部を使って、Bristow は自ら Wilde の伝記的な記述を試みる。同時代の Wilde 像、客観的に見た Wilde 像がいかに一般に流布したもののから掛け離れているかを示し、その潤色のベクトルを明らかにしようというのである。では何故「事実」を離れ、現在に続く誇張と潤色に満ちた Wilde 像が形成されることになったのか。Bristow はこのプロセスを 2 つの面から考察する。そうした Wilde 像の供給の系譜と、その受容の系譜である。供給面に目を向けるなら、米国ツアー時の宣伝活動、これにも関連する Gilbert と Sullivan の *Patience* の存在に始まり、裁判後の Wilde 批判に対応して紡ぎ出されてゆく Wilde 支持者達、Sherard や Harris などの一種広報的な言辭などが存在した。そして Wilde 自身も、まずその一部が 1905 に *De Profundis* として出版される獄中手記において、現実とはかけ離れた自分の華々しい文学的地位を夢想し、自己称揚を行うのである。その後、こうした Wilde 像はいくつもの伝承を生み出し現在にいたる、と言うことになる。

しかしこの現象を考える上でさらに重要なのは、こうした Wilde 像をその時々支持し、あるいは要求することによって長らえさせてきた受容側の系譜だろう。Bristow の考察は、この面に関しては必ずしも十分なものではない。たとえば Ellmann による伝記が大きな支持を得たことに関しては、“Ellmann, for all the pitfalls of his expansive biography, captures the cheering spirit in which the 1980s and 1990s would embrace this figurehead of flamboyant aestheticism and insubordinate Decadence: a

progenitor, it seems, of what we moderns have become, or what - perhaps more accurately - we have come to tolerate.” (9) とするが、残念ながら具体的な指摘には欠けている。しかし Bristow による問題提起は、それ自体が十分に興味深いものであると同時に、続く各章を相対化し、それぞれの Wilde への取り組み、それに託されているもの浮き彫りにしてくれるという点で、第 1 章にふさわしい役割を果たしていると言えるだろう。

第 5 章 Oscar Wilde, Commodity, Culture (Dennis Denisoff)

Denisoff は、ここ 30 年間ほどの唯美主義研究では、“commodity” と “culture” が 2 大キーワードとなっており、この対照的な単語の一見パラドクスのな結びつきに、Wilde 理解の大きなヒントがあると主張する。そして Wilde と消費文化との関わりに注目することによって、Wilde が持つ多面性や、矛盾を内包するその言説に一定の理解を与えることができた、と考える。加えて、衰える兆しのない Wilde 需要を呼び起こすメカニズムを、こうした視点から説き明かそうと試みている。

まず Denisoff が行うのは、Matthew Arnold から説き起こしての、消費—文化論史の復習である。1960 年代の Raymond Williams、Susan Sontag をへて、1980 年代あたりから話は核心に入ってゆく。これは、Wilde と唯美主義との関わりにはそれを通して金銭的な利益を得るという側面が存在した、という考え方が登場した時代である。Denisoff は、Regina Gagnier が *Idylls of the Market Place* (1985) において、受動的に商品として扱われる personality の概念に、能動的に社会に反応する一面を付け加えたことに注目する。これは Williams や Sontag からの訣別を意味するが、Gagnier はそうすることによって時に Wilde に見られる不統一性、内包された矛盾への理解を得ることが出来るとする。つまり矛盾とも見えるものは、Wilde が読者・聴衆に合わせて対応した結果であると考えるのである。このような Gagnier による経済学的視点、マーケット論的な視点の導入は、Wilde に留まらぬ唯美主義者全般への考察に及ぶものであった。

そこで Denisoff が Gagnier に対置してみせるのが、Ian Small と Josephine Guy によるテキスト社会学的なアプローチである。Small は、Gagnier が用いる経済モデルは当時のマーケットの状況を反映していない、と批判する。そして代わりに提案するのが、作者を取り巻く外的・物的状況を歴史的視点から総合的に勘案し、作者の創作活動との影響関係を検討する、という方法である。Small と Guy によるならば、Wilde の創作活動は経済的にはほとんど失敗の連続であり、マーケッ

トを読むことに長けた人間の仕業とは考えにくい、ということになる。つまり Wilde の創作活動はその時々のお金の必要に駆られての場当たりのものであり、そのパーソナリティも、多くの場合は Wilde 自身ではなく他者によって形成され、売りに出されたものだ、と考えられる。

Denisoff は Small と Guy が示す方法論の有効性を認めた上で、2人が他の手法、Wilde の Irishness や gayness に傾注する方法などを Wilde をフェティッシュのごとく扱うものとして否定するのは行き過ぎである、とする。そうした手法は必ずしも排他的ではないし、Small と Guy の方法論も他の手法と補い合うことによってこそ効果的であると考えるのである。同時に Denisoff が注目するのは、Wilde は文化産業の一部となっていたが、自らそれを利用するよりも利用される立場にあった、という Small と Guy による指摘だ。Denisoff はこの着眼を引き継いで、こうした状況は Wilde に自己の社会的位置が経済的にも周遍的なものあることを自覚させたであろうこと、“The Soul of Man under Socialism” を始めとする作品に見られるような社会主義思想は、そうした経済的依存の自覚の反映と考えることが出来ることを指摘する。

すでに述べたように、Wilde と唯美主義の関わり、その背景にある文化の商品化を考える上では、それらをめぐる Wilde の言説が一貫しないという問題を解決しなければならない。Denisoff はこうした状況を説明するものとして、Gagnier、さらに Small と Guy による対照的なアプローチを取り上げてみせた。しかしいずれの説を採るにせよ、Wilde の言説が一貫した全体像を示そうとしないことには変わりがない。Denisoff はこの点に注目し、シガレットを完璧なる快楽と断じた Lord Henry の科白に言及しながら、Wilde の作品や言説が示すパラドクスの性質が、Wilde 自身に「完璧な快楽」としての機能をもたらしていると指摘する。そしてこれこそが Wilde 研究という消費活動を促す力であるとするのである。

第8章 Gay Studies / Queer Theory and Oscar Wilde (Richard A. Kaye)

昨今 Wilde 研究で最も活気があるのがこの領域なのは議論の余地がない。Kaye の言葉を借りるなら、Wilde は文学界最初のスーパースターであり、今やヴィクトリア朝時代を代表する作家として、かつて Dickens や Bronte 姉妹が占めていた位置にある、ということになる。そして Ian Small が言うところの Wilde 研究における新たな領域、the Gay Wilde, the Irish Wilde, the Wilde who represents Consumption の中でも最も活発なのがこの領域なのだ、と宣言してみせる。

この章を通して、始めから終わりまで途切れること無く語られるのは Gay Stud-

ies と Queer Theory との相違、両者の間にある隔絶である。Kaye は自分の足場が Queer Theory 側にあることを明言した上で、Gay Studies の問題点と Queer Theory の優位性を主張し続ける。Gay Studies が取りがちな還元主義的な文学評伝的手法を否定し、センチメンタルな思い入れや共感をもとに Wilde を gay-martyr と考えるようなあり方への反発を見せる。一方これに対して、Queer Theory は論理的に厳格で安易な共感を排し、Wilde を文化的 “object” あるいは “product” として取り扱う、というのが Kaye の主張となっている。Gay Studies が “romantic ‘love’” を語るところで “erotic ‘desire’” を論ずるのが Queer Theory だと言うのである。こうした一連の記述に透けて見えるのは、同一領域内での方法論上の対立にとどまらぬ、Gay Studies の手法そのものの忌避である。あたかもそれが Queer Studies の有り得べからざる形だとも言うように、執拗に Gay Studies の否定が繰り返される。しかし章も半ばまで進むと Kaye の論調はいくらか様相を変えてゆく。比較的新たな Queer Theory の流れには、それまで避けられ否定されてきたいくつかの要素、対象への共感、歴史的手法、フロイト的手法などが導入され、すでに大きな成果を上げていることが指摘されるのである。フロイト的手法をのぞけば、それらは Gay Studies の典型方法に他ならない。こうした流れを Queer Theory の新たな展開と考えるべきなのか、あるいは何物かからの解放とすべきなのかは、一考に値するだろう。

すでに書いたように、全巻を通読して面白いのは、なにより各章の重複部分を読み比べることだ。あちこちで目にする名前はいえ、まずは Ian Small と Richard Ellmann である。この章でも、Ellmann の *Oscar Wilde* については、数ページを割いて Queer Theory の視点から再評価が行われている。Ellmann の方法が Queer Theory の厳しい眼鏡にかなわぬと言うことは容易に想像できるとおりである。Ellmann は Wilde の政治的・歴史的機能を看過しているし、sexuality に対する歴史的視点にも欠けている。また sexuality の mobility を認識することがないなど、諸々の Queer Theory 研究者が指摘してきた難点のリストが長々と続く。一方、Wilde を研究対象たりえる地位につけたことを評価する点では、Kaye も他の執筆者達と変わらない。それに加えて Kaye が特に賞賛を惜しまないのが、まず Ellmann が Wilde と Alfred Douglas の恋愛を、Joyce と Nora の恋愛のように、Wilde の生涯の転機として肯定的に捉えているという点、さらに Wilde を英国及びヨーロッパにおける同性愛の系譜の中に位置付け、同時にこの問題をヨーロッパ文化における主要な問題として前景化している点である。

この章の最後に取り上げられているのは2本の映画、Brian Gilbert 監督による

Wilde (1997) と Todd Haynes 監督による *Velvet Goldmine* (1998) である。ここでも Kaye は Gay Studies と Queer Theory の対比を繰り返して見せる。*Velvet Goldmine* を例に、Queer Theory 的方法による広義の Wilde 研究が、衰退する文学ジャンルを超えた展開の可能性を持つことを示そうと試みるのである。さらに Queer Theory が Wilde 作品の中でももっぱら *Dorian Gray* と *The Importance of Being Earnest* に集中してきたことを取り上げ、その前途には多くの作品、大きな展開の余地が残されていることを指摘する。すでに多様性を見せつつある Queer Theory が、昨今の Wilde 研究における主流の一つとして、これからどのような姿を見せることになるのか、誠に興味深い。